



写真：巨理町の悠里館



## あれから十年

伊藤 俊二  
(青岬)

気仙沼と登米を主な舞台に展開されたNHKの朝ドラ「おかえりモネ」は東日本大震災を経験した人達が心の傷を乗り越えていく物語であった。その十年を自分に重ねる方も多かったと思う。

先日、気仙沼俳句協会前会長の菊田島椿さんが訪ねてこられた。氏はあの震災を「海は恐ろし海は懐かし今朝の秋」と詠まれた。気仙沼海の俳句大会で選者の宇多喜代子氏の特選を得た句である。

暫くお会いしていなかった氏は、テレビで活躍されている夏井いつき先生が気仙沼に来られるという。案内のチラシには「気仙沼のみなさん！夏井いつきさんと『俳句でトーク』しませんか？」とあり、「これまでの10年」か「これからの10年」をテーマに「具体的なエピソードを俳句に詠み込んで下さい」というものであった。案内のチラシの裏側には「俳句を作ろう！虎の巻」と題して、簡単に作れる魔法の技として「取り合わせの型」のこつを覚えようというのがあり、広く一般の方々に呼びかける姿勢に共感したことであった。

震災当日、氏は退院の日であり、大島の船着場で津波に襲われた緊迫感のある記述が句集『端居』のあとがきにある。句集名の『端居』は涌谷金俳句大会で選者中村孝史先生特選句「海遠き終の住処の夕端居」によるという。「今朝の秋」、「夕端居」の句に氏の胸中を思うばかりである。

その日、気仙沼海の俳句大会実行委員会が魚市場近くの気仙沼中央公民館の会議室で行われていた。大きな揺れに会議中断、避難は渋滞に巻き込まれる中、やっとの思いで自宅に辿りついたことが鮮明に思い出される。十三人の参加者の方々は車のまま流され、翌朝救助された方、何日も避難所で過ごされた方もあった。その十年の中で俳句を詠むということは自分を励ますものになってきていたように思う。自選ではあるがこの間の句に「夏燕おのれ励ますための鋏」〈泣きたしといふ日もあらむ黄水仙〉などの句を詠んでいた。

『俳句でトーク』でどのような俳句が詠まれ、どのような選句、選評がいただけるか楽しみである。Eテレで十二月に全国放送されるという。あの津波を乗り越え今を生きる方々はそれぞれ昨日のことのように思い出される筈である。俳句を詠むことよって多くの人と出会い、励まされている。俳句を詠むことの恩寵を思うばかりである。

小田 桐妙女 (陸)

いつぺんの花びら石をあたたためる

この句は「陸」八月号で陸路集巻頭をいただき、中村和弘主宰から「(略) ささやかとも思える光景。(略) そこにこそ詩があるのかも知れない。(略) シンプルがゆえに象徴性を帯びる」と選評をいただいた。実際に見た風景かどうかは内緒だが、脳内にひとつの「花びらと石」が作られた。希望の句でもある。

夫の転勤で岩手県に行く予定でしたが、しばらくは宮城県に居ることになりそうです。どうぞ、これからもよろしくお願いします。

菊地 幸子

上り目の尾灯に睨らまる暮の秋

昨今の新車の尾灯は各メーカーが一樣に上り目、狐目で後続車はまるで睨まれている様な気がする。その思いが掲句となった。後期高齢者乍ら車が大好きで未だにハンドルを握っている。二昔前?には俳句饗宴の菅井青宵氏、姑のさたよ(駒草同人)、句友たちを栗駒の世界谷地、山形のこんにやく番所、春雨庵等愛車を走らせた。カーナビの無かった時代、地図を頼りに度胸があったものだと思う。JAFのお世話にならなかつた事は幸いであった。

一 句 一 葉

小松 雅朗 (ロマネコンテ)

痛みから明日が見える草もみじ

我が国の一〇〇歳以上の人口が数年前には四万人余であったのが、現在は八万数千人余であるという。然し、新聞などの報道によれば八〇代で亡くなる方が結構居られるのでその実感がない。かくいう自分はというと、歩行がままならず買物などはタクシーに頼りっぱなしであり、そろそろ余命を感じる今日此の頃である。不都合なことは全て齡のせいにして余生を楽しみたいと思う。先ずは明日が来ることを信じて……。

佐々木 和子 (岬句会)

天職に誇りありけり田水張る

月刊『俳句界』四月号にて兼題「天」の部で特選を頂いた一句です。

私の生家は稲作を中心とした專業農家です。田んぼは平坦な整理田だけでなく山間の沢田が多く苦労も多かったようです。先祖から受け継いだ農地を守るべく働いてきたのだと思います。そんな姿をずっと見てきて、農業は天職と思いついて誇りを持って働いていたと思うようになり親達のことを詠んだ俳句です。選者の名和先生より身に余る講評を頂き何よりも嬉しかったです。

庄子紅子（牧・青岬）

### 母の日の輪ゴム溜まってあたりけり

割烹着の母はいつも袖口に輪ゴムをかけて忙しく働いていた。昭和の頃、輪ゴムは日常の中でちよつとした役割を果たしていた。物を包んだり、袋の口を閉めたりするのに丁度いい道具だった。今では殆ど使うこともなくなつたが、家の引き出しには輪ゴムが溜まっている。ないと何となく落ち着かないのだ。一度無くなつてしまった時にはわざわざ買い求めてしまった。その箱には、輪ゴムではなくサークルバンドと表示されていた。

菅原 せい二（俳句人）

### 街紅葉遠景わくわく投ず四票

四票の内訳は、衆議院選、比例区、最高裁判事用、知事選への投票です。

先頃実施された衆議院選に私は、投票日前日「期日前投票」に出かけました。現在、暮らしている後期高齢者施設「エバグリーン・ツルガヤ」から車椅子での初投票。介護タクシーを利用、朝迎えに来た娘と一緒に乗りこみ出発です。この日は、清しい秋晴れとなり、逸る心でウキウキしながら出かけました。沿道の銀杏は金色、カエデは紅鮮やかで初のチャレンジを祝福しているかのようでした。

## 一 句 一 葉

高平佳典（石の花）

### 不発弾と添い寝の遺骨慰霊の日

沖縄戦の遺骨と不発弾は今も沖縄の島のいたるところに埋もれている。

沖縄県民の多数が反対する辺野古新基地建設。政府は、こともあろうかその埋め立てに摩文仁の丘の遺骨混じりの土砂を使用すると言う。

慰霊のころはどこで失われたのだろうか。

武山 平（青岬・群青）

### その家は重くはないか蝸牛

三陸海岸の波打際に、家督として生まれ育つた。今もその意識が強い。震災後分家は飛散したが、両親は今も海を眺め暮らしている。

家制度の古い考えと現代の考え方が、私の中に共存しているようだ。蝸牛を見つけた時、ふと過ぎつたのが掲句である。「家」を重く感じている本心に気づかれた瞬間である。

俳句は時に、自覚していない本音を見せることがある。俳句が生まれる一瞬に自分自身が驚かされる。俳句は気づきの器のようだ。

鶯 とく子 (海原)

### 鶴凜として現在未来見据えて可

結社「海原」二〇二一年六月号に四月号同人作品より共鳴二〇句の中の一句です。

文は転じて正岡子規の庵を訪ねた折のこと。

鶯谷駅に下車して北口から五分位で子規庵に着きました。

高い板塀に囲まれた旧子規邸は糸瓜棚もあり、当時を彷彿させる感がありました。また道すがら豆腐料理の専門店「笹乃雪」入口の脇に子規俳句の板が二句掲げられていたのがとても感慨深く、下町情緒もあり、懐かしい思い出です。

中山賢助 (岳)

### はらからに呼び掛くる青春波濤

(「岳」二〇二一年六月号)

東日本大震災から、今年で十年を迎えた。公共インフラの整備は進み、おおむね完了したように見える。しかし、被災者の方々の「心の復興」は、これからである。

忘れることの出来ない三・一一。多くの方々が、毎年春の海へ向かって呼び掛けてきたのではないだろうか。その無念を共有し、あの震災で生かされた者として、言葉を磨いて自分の句を詠んで行きたいと思う。

## 令和3年度新会員紹介 (12月現在)

## ようこそ、現俳へ。

泉 陽太郎 (海原)

虫の音はたぶんわたしのむすめです  
デカケルと冬のホテルの窓に書く

火星では死体はかるいいわしぐも

二〇二一年に当時の海程に入会し投句を始めたのが俳句のはじまりでした。漠然とではありますが、何か表現してみたいという気持ちがあったのだと思います。それまでは仕事や生活上の文書を書くくらいしかありませんでした。理路整然と書くことを心がけてはおりましたが、なかそこを越えてゆくようなものが書いてみたいと思っただけで、なにかふらふらとしたきつかけで始めましたが、周囲の皆様を支えられて何とか今まで続けてこられました。これからもどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

奥村俊哉 (小熊座)

ビル街の底月光に息継ぎす  
工房に木屑まみれの手や時雨

かかと上げ願の糸を結ぶ子等

大学に入学した三年前、新しい環境に馴染むことができず、誰ともつながり合えない孤独に打ちのめされて大学をさぼり家に数か月引きこもっていました。その期間にブレバトをみたことで俳句を始め、以降俳句にその孤独をぶつけて来ました。僕にとって俳句はノアの方舟ですが、ひとりぼっちで俳句を詠んでいるとその方舟に閉じ込められて二度と出られなくなってしまうように錯覚するので、皆様の一員として俳句を詠めることが救いとなることを祈っております。

菅原 はなめ (小熊座)

火星移住計画近し大花野

死人の名ばかり覚えて受験かな

白息と気づくひとりになつてから

俳句を始めてから五年と少し。高二の春、友人に誘われ恐る恐る部活に参加した時には、こんなに長い付き合いになるとは考えてもいなかった。俳句の好きなどころは、生活にちよつとした発見を与えてくれるところだ。句作を始めてからは視界が広がったように思う。日常にはまだまだ知らない側面があるということを、たった十七音は教えてくれた。これからも、良いことも悪いことも俳句の糧としていきたい。

渡辺誠一郎著

## 『佐藤鬼房の百句―成熟に抗して』

(ふらんす堂)

石母田星人

(滝)

ふらんす堂百句シリーズの一冊。見開きの右頁に大家の一句、左頁にその句についての文章という構成をとる。本書は著者の渡辺誠一郎が、佐藤鬼房の百句に鑑賞・解説を付けている。

俳句の鑑賞は想像で成り立つ。鑑賞だけの本ならあまり意味がない。だがこの本は違う。渡辺はずっと鬼房の傍にいた。そこに価値がある。

例えば、

鉛舐めて孤独擬や十三夜

の句の鑑賞・解説の後半にこうある。

「そういえば、鬼房は糖尿の病を患い、時々鉛玉を口に含んでいた。その表情はいつものように厳しく、孤独顔ではなかった。」

愛痛きまで雷鳴の蒼樹なり

の句の終わりの段落には、

「そういえば、鬼房は見得を切るのがうまかった。かつて、若い俳人らを前にして、「彼らの矢玉に当たって死にたい」と言い放つたことがあった。」

鉛筆を握りて蝶の夢を見る

の句の後半部分には

「鉛筆といえは、不用の広告紙を裏にしてバインダーに綴じ、短くなった鉛筆で、俳句を書きつけていた鬼房の姿を今も思い出す。」とある。

これらのエピソードの部分は、渡辺が鬼房の息遣いを身近に感じていた証。結社誌には何度も登場した出来事であるが、これらの話には、人間鬼房を感じ取ることができる。こんなエピソードがちりばめられた渡辺の鑑賞・解説。鬼房ファンなら読んでおくべきだろう。

本書の終わりに「詩魂高翔―成熟に抗して」の文がある。渡辺はこの中で、鬼房の第一句集から紐解き、改めて鬼房が求めようとした世界を辿っている。文の後半部分を紹介する。

鬼房は蛇笏賞の受賞の際、自らを「翼を欠いた鳥」に喩え、「永遠の飛翔願望」を抱くと語った。「地を這うばかりの哀しい存在」であり、「土俗に愛憎を傾けすぎる」とも。それは生きることへのしたたかな強さそのものであった。瘦身の中には、土俗的なエネルギーが常に湧き立っていた。そして成熟の誘いに抗するように、必死に蒼樹、あるいは修羅にならんとした。と同時に、幼くして故郷を出たという「流民」意識は強く、詩想は遙かな彼方を遠望するのが常であった。

死後刊行された句集『幻夢』には、詩想への思いを隠さず、さらに高みをめざす最後の鬼房の姿がある。明日に春を待つ妄想の中で、永遠なる命を目指すように、大いなる死(生)へと最後の力をふりしぼる。そして、現実のさまざまな枷から解き放され、次なる世へと向かうのだ。

これは常に傍にいて師の薫陶を受け、その精神に共鳴した者だけが書ける文章だといえよう。鬼房の絶えざる自己改革の精神には目を見張るものがある。

潮びたる陰毛流失感兆す

昭和三十五年五月のチリ地震大津波の一句。塩竈も被災。この句を渡辺は「鬼房は被災した情景や自らの体験を、皮膚感覚そのままに詠む。〈潮びたる〉と、まさに津波による被災を、下半身に及んだ不快な〈流失感〉として生々しく捉える。」と巧みに鑑賞した。私も十年前に泥の中をさまよった身。この皮膚感覚がよく分かる。百句の中ではこの句が一番魅かれる。

# 赤間学句集『白露』

(朔出版)

坂下 遊馬

(小熊座)

平成三十年から令和三年まで、三年間の三九三句を収録した作者の第二句集。第一句集の『福島』を上梓後、僅か三年での刊行である。句集のあとがきに、昨年十一月に大病を患われたとあり、作者のエネルギーに瞠目した。

東日本大震災というカタストロフィ。土木技術者として港湾施設の建設に関わってきた作者にとつて建造物への喪失感や想像に難くない。まさに句作においても転換点となつたに違いない。

句集より

蒲公英に戦車の男来て寡黙

蒲公英、戦車の色彩と重量感の対比が面白い。踏み潰されるだろう蒲公英に近づく戦車の男、寡黙の措辞に隠された心情を感じる。

夕立はみな佛にしてしまふ

夕立は、近年異常気象によりゲリラ豪雨、集中豪雨などと呼ばれる。夕立の匂い、過ぎ去った後の空気感、夕立には風情がある、すべてのものを佛にしてしまうほど。

水番のひとりは月に睡りけり

盛夏、農家では田水が不足し水泥棒が現れたという。昔日の話か。傍題に「堰守」など。水番の中の一人、見張りをしている緊迫感もなく、月下、寝息を立てている。

震災句では、私も被災者の実体験を仄聞いたことがある。

紅梅やうしろに浪の現るる

袋掛けラジオは地震を告げてゐる

想はねば海は消えゆく羽蟻の夜

廃炉塔墓標の如くかぎろへり

第一句集『福島』に掲載された(福島島の火蛾にならねばならぬかな)に通底する句集であり、大震災や大病をくぐり抜けてきた作者の再生の句集である。

## 第35回現代俳句東北大会(岩手県)入賞作品

現代俳句協会賞 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
山稜蝦夷の戦場に掘る山の芋  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋

秀逸賞 麦秋や土偶にうすき孕み皺  
みんみんの木が語りだす終戦忌  
吊皮のぶつかり合つて広島忌

佳作 賞 山稜蝦夷の裔の喉仏  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋  
雁帰るいま暁闇に残る声

高野ムツオ特選 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
海境に死者の渦あり花すみれ  
海境に死者の渦あり花すみれ

対馬 康子特選 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
雪の夜の赤子の瞳よく動く  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋

坂下 遊馬特選 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋

佐々木和子特選 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋

鈴木 三山特選 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋

春日 石疼特選 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋

池田 義弘特選 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋

大河原真青特選 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋

大類つとむ特選 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋

鳥山カツ子特選 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋

片倉 弓特選 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋

田村 正義特選 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋

牧 ひろし特選 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋

千葉 芳醇特選 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋

名久井清流特選 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋

大澤 保子特選 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋

## 第58回現代俳句全国大会入選作品

照井 翠特選 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋

五日市明子特選 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋

住 作 入賞 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋

高野ムツオ特選 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋

酒井弘司特選 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋

清水道径特選 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋

武田伸一特選 幼霊も乗りてかたむく茄子の馬  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋  
阿弓流為の戦場に掘る山の芋

百理吟行会 令和三年十二月五日(日) 於・百理町

新型コロナウイルスの感染が落ち着いたこともあり、約二年ぶりの吟行を開催した。中村孝史顧問にもご参加いただき、二十名で、伊達成実霊屋・称名寺のシイノキなどを巡り、充実した吟行となった。最高得点は、星節子さん、小田島渚さん。詳しいご報告は次号にて。

敗蓮の突つ伏す水の白さかな

冬の鳥戦死者慰霊塔小さし

山茶花や祖先も地震の地に生きて

冬ぬくし巨木の洞に目がひらく

荒涼のきわみ枯蓮の静まれる

巨理は宙の破片大地の侍招く

冬紅葉奥羽制覇の夢知らず

人声に触れて反りみる蓮の骨

田道行く男を追って冬の蝶

涅槃物冬光芒に小指たて

葷酒なく山門入りぬ十二月

銀杏落葉呼びかける母の声やさし

青空の動かぬ水面蓮の骨

菩提寺の寺域彩る冬紅葉

冬日に少し唇あけてる寝釈迦牟尼

椎の枝の夜見よりの手か冬ざるる

小六月白き寝釈迦の鼓動聴く

転げたる殉死の墓石冬紅葉

箒目の正しき寺や大冬木

日向ぼっこにあらず海を背にする涅槃仏

浅川 芳直

浅沼眞規子

伊澤てつを

小田島 渚

大坂 宏子

加藤 邪吞

菊池 修市

日下 節子

黒河内玉枝

小関 桂子

小村 寿子

紺野みつえ

坂下 遊馬

佐々木和子

中村 孝史

平山 北舟

星 節子

丸山みつほ

嶺岸さとし

渡辺誠一郎



## 慶祝（2021年）

高野ムツオ顧問（多賀城市市政施行五十周年記念表彰）  
丸山みづほ（第45回宮城県俳句賞本賞）  
坂下 遊馬（第45回宮城県俳句賞準賞）  
野田青玲子（第58回宮城県芸術祭賞）  
佐野 久乃（第58回宮城県文化振興財団賞）  
小田島 渚（第39回兜太現代俳句新人賞）

### 研修会のご案内

「ネット句会システムを利用して句会をしてみよう（仮称）」  
四月頃開催予定です。日時・場所などは決まり次第メールいたします（日程が合わなくなった場合にはキャンセルいたできてかまいません）。スマホもしくはアイフォンをお持ちの方でメールができる方に限ります。下記メールアドレスに「氏名もしくは俳号（よみがな）・結社名（無所属の場合は無所属）・携帯電話番号」を令和四年一月三十一日まで左記にメールください。お申し込みから一週間以内に必ず受付のご返信をいたします。ご返信がない場合には事務局坂下までお電話ください。

miyagikengh@gmail.com （小田島まで）

現代俳句協会ホームページにて、無料動画配信されている「地区協会長インタビューシリーズ」。第七回は、渡辺誠一郎会長と小田島渚氏（青年部）です。塩竈市のビルドスペースで開催された「渡辺誠一郎展」が撮影場所となっています。ホームページでぜひご覧ください。  
<https://gendaihaiku.gr.jp>（もしくは「現代俳句協会」で検索）

## 編集室から

◆新型コロナウイルスの新規感染者数が九月中旬から激減しています。ワクチン接種の普及、マスク着用・手洗い等の感染予防の浸透、ウイルスの変異による自滅説など、その理由は不明のまま。「第六波」への不安を抱きながら、感染予防を心掛けています。もう少しの我慢？

◆前号、特集した座談会で、会報に広く会員の紹介や記事掲載などの提案がありました。今回、十名の方の「一句一葉」を企画いたしました。会員の皆様の交流の場のひとつとなればと思います。次回以降も、継続して掲載していきたいと思っておりますので、ご協力をお願いいたします。

◆新たな企画として、「ネット句会システムを使って句会をしてみよう（仮称）」という研修会を開催予定です。今回の会報にITに関するアンケートを同封いたしました。協会の運営に活用させて頂きたいと思っておりますので、研修会の出欠に関わらず、ご回答をお願いいたします。

（遊）

発行所 宮城県現代俳句協会

令和三年十二月二十日発行

発行人 渡辺誠一郎

編集部 坂下遊馬、小田島渚、浅川芳直

事務局 〒九八九―二三五一

宮城県亘理郡亘理町北新町三―二三

坂下遊馬 方

電話〇二三―三四―一七八一